

『1年間でできる米国大学院学位留学』

ダブルディグリープログラム

～米国大学院工学修士号取得の道のり～

Double Degree Program

at Graduate School in the U.S. :

The Way to Get the Master's Degree

at Graduate School in the U.S.

大阪府立大学大学院工学研究科卒 長谷川 貴彦

HASEGAWA Takahiko

(Graduate Student, Mechanical Engineering, Osaka Prefecture University)

キーワード：ダブルディグリープログラム、学位留学

1. はじめに

～ダブルディグリープログラムとは？～

ダブルディグリープログラム、留学を経験された方々も、そして留学をこれから考えている方々もなかなか聞き覚えのない言葉ではないかと思います。実際、私が初めてこの言葉を知ったのも大学4年生の時でした。日本語では「複数学位取得制度」と呼ばれる留学制度です。その名の通り、2つの学位を取得する留学プログラムです。私の場合、大阪府立大学大学院の工学修士号と、アメリカ・ウィスコンシン州立大学大学院ミルウォーキー校(University of Wisconsin-Milwaukee Graduate School、以下 UWM) の工学修士号の2つの修士号を取得するプログラムでした。通常、日本もアメリカも修士号を取得するためには博士前期課程を2年間かけて終了する必要があります。しかし、このプログラムは「1年間で米国大学院の工学修士号を取得」することができます。そのために、大阪府立大学大学院で2年間、UWMで1年間かけて、計3年で2つの工学修士号が取得できるプログラムです。

～ダブルディグリープログラムのメリット～1年間でできる学位留学

このプログラムの最大のメリットは、1年間の協定留学でありながらも、米国大学院で学位取得を目的とするいわゆる学位留学の扱いとなる、という点です。大学間の留学協定に基づく留学プログラムのために、UWMの大学院入学試験は免除され（TOEFL iBTの点数のみ基準あり）つつも、現地の学生と同様にUWM大学院に入学することができ、1年で修了することで修士号を取得することができます。すなわち他の正規留学と比較して、ハードルは低く、かつ学位取得が可能です。

2. 留学を決断するまで

私が留学を決意した理由は、就職する前に、自分には海外で長期生活し、大きな目標を達成する力があるのかどうかを確かめたい、そしてその力を身につけたいと思ったことであった。自分の将来の夢は発展途上国のインフラ整備に貢献し、人々の暮らしの向上に貢献することである。その夢を叶えるために、将来海外で働く力が自分にあるかどうかを確かめたいと思ったのである。

その想いを胸に大学生生活を過ごし、3年生の後期、研究室選択をする際、自分の所属する大学の大学院がダブルディグリープログラムを持っていることを知った。初めての留学にしては長期となる1年間、米国大学院に留学でき、かつ単位取得と修士論文発表という大きな目標を達成することが求められる。海外で長期生活し、大きな目標を達成する力を身につけるのにぴったりだと思い挑戦を決意した。

3. 留学中の生活

(1) 授業

UWMの学位を取得するという事は、もちろん卒業（修了）に必要な単位を取得する必要がある。私は、工学研究科機械系専攻で留学したため、UWMでは主に数学と専門の機械工学（流体力学）の授業を受講した。

私にとっては初めての留学であり、予想通り、まずは言語の壁に悩まされることとなった。先生の言っていることがなかなか理解できずに苦しんだ。さらに、言語の壁のみならず、文化の壁もある。日本では、先生から質問があるかどうか聞くタイミングをとることはごく一般的であるが、米国の授業ではそれはなかった。質問がある場合は、先生が話している途中でもその場で生徒から発言をしたり、意見を述べたりし、授業へ自発的に「参加」することが求められる。この2つの壁を乗り越えるために必要なことは「わからないことから逃げずに、自分が理解できるようになるまで聞き続けること。」だ。初めは、授業に全くついていくことができなかつたため、授業後に先生を捕まえて、個人的にわからない箇所をわかるまで聞き続けた。毎授業30分から1時間質問し続けてやっと授業内容を理解できることがほとんどだったが、アメリカではそういう姿勢はとても評価されるとわかった。そ

れもまた、授業に自発的に参加しようという意思の表れだと先生から評価されたのだと思う。これを続けていくことで、授業中に内容を理解できるようにもなり、先生とのコミュニケーションも取りやすくなり、授業中も会話をしやすくなった。

語学の授業ではなく、数学、機械工学といった大学院レベルの専門の授業であったため、専門知識の壁というものも感じたこともあった。しかし、これは何も自分だけではなく、他の周りの学生にとっても同じであった。アメリカの授業は単位を取得することがとても困難であり、課題も毎回出る。その課題に周りの学生とともに授業後図書館で取り組むことで良き友達もでき、同時に課題をやりとげることにもつながった。自分の殻に閉じこもるのではなく、勇気を出して周りの人とコミュニケーションをとる。これが大事だと感じた。先生にも周りの学生にも「自分から」コミュニケーションを取りに行くこと。これが単位取得をやり遂げることができた成功の秘訣だと私は思う。



写真1：UWMのキャンパス（建物は図書館）

（2）研究生生活

大学院の留學生活のため、修士論文を1年で書き上げる必要があった。ダブルディグリープログラムでは1年で学位取得が可能な留學であるが、その分通常2年かかるところを1年で研究成果をまとめ、修士論文を書き上げなければならない。その難しさを特に後半の半年間で感じるが多かった。そういった焦りがありながらも、大事なことは一所懸命、粘り強く研究活動に向き合うことであると思う。

また、私の研究生生活では特にチームワークの取り方でとても苦労した。初めに研究室の担当教授に留學前に日本で取り組んでいた研究テーマに一番近い研究チームに配属させてもらい、顔合わせを行った。初めのあいさつの時、とても好意的に受け入れてくれた。しかし、いざミーティングが始まると、議論のスピードも速く、多人数での議論であり、まだ当時は言語の壁も感じていたために、会話についていくことができなかった。そのミーティングは毎週行われており、各自の1週間の進捗と、

この1週間の担当課題を決めている。チームリーダーが各メンバーに役割を与えたり、各メンバーが自分から発言、提案して自分の役割を取りに行ったりしていた。その中で、自分だけが議論に参加できず、リーダーからも何も役割を任せてもらえるというわけでもなく、なかなかチームの中に入り込むことが難しいと感じる日々が続いた。何とか議論に参加できる方法はないかと考えた結果、ミーティングの時とは別に、各メンバーと1対1で話し合う機会を自分で作りに行くことを試みた。多人数の議論いきなり参加することは、英語でのハイスピードな専門的会話という点で少しハードルが高く感じることもあるけれども、1対1なら自分のペースに合わせて話してもらうことも可能であるし、かつ分からないことはその場で聞きやすいと考えたからだ。授業の欄でも述べたが、先生を授業後に捕まえて質問したのと同じことだと思う。初めから他のみんなと同じように参加することが難しくても、まずは「1対1のコミュニケーション」ならできる。このおかげでミーティングの議論でわからないことも理解できるだけでなく、チームが抱える課題に対して、自分の考えを提案することもでき、かつ日本での研究活動で身につけてきた知識を伝えることができ、自分の得意分野を伝えることができた。これを各メンバー1人1人に対して自分で足を運んで行うことで、少しずつメンバーとも打ち解け、ミーティングでも発言、意見を述べることもできるようになった。いろいろなやり方もあると思うが、私の場合はこのように少しずつ段階を踏んでからであるが、輪に溶け込んで「参加」することができた。

何事も「自分から」動く、聞く、話しかける。その姿勢を続けていれば周りの人々は耳を傾けてくれるし、その姿勢はちゃんと評価してもらえる。授業でも研究でもこれが大事だと思う。

このようにして少しずつ研究結果がまとまり、学会発表に2回参加することもできた。学会会場は1回目はワシントンD.C.、2回目はシカゴだった。会場はアメリカ国内ではあったが、国際学会であったために、海外から、もちろん日本からの学生も発表していた。やはり海外で長期間ずっと暮らしながら研究をしてきた経験が活かされ、発表時も落ち着いて発表し、質問も聞き取り回答することができた。海外での研究活動の経験が、自分の発表する力、また発表を聞く力を大きく伸ばすことにつながったと感じた。この時には英語でのコミュニケーションに慣れていたために、懇親会の時間でも積極的に他の学生にも話しかけることもでき、意見交換もできた。普段の学会より収穫も多く、とても有意義な学会にできた。



写真2：学会会場の様子(ワシントンD.C.)



写真3：学会発表ルームの様子(ワシントンD.C.)

そして、1年の研究活動を経て、修士論文を書き上げ、最後には90分間のプレゼンテーションを審査員の教授の方々に行い、審査してもらった。とても緊張したが、プレゼンテーション発表自体も、質疑応答にも適切に対処することができ、最後には「とても興味深い発表だったよ。」と言葉をかけてもらい握手してもらえた。そのあと、審査結果のシートをいただいた。中身を見ると見事「Pass」のチェックがあった。その時は、1年間の頑張りが認められたと大きな達成感を感じた。

4. 最後に

私の留学生生活をまとめると、一番大事なことはやはり、「自分から、1対1のコミュニケーションからはじめる」ことだと思う。いろいろな困難はあったが、それでも粘り強く、逃げずに取り組んで解決の道が見つかり、成功へとつながった。

留学で得た一番の収穫は、何とんでも「自信」。初めての留学が米国、そして1年間の学位留学という不安の多いものであったが、それでもその大きな目標を海外で成し遂げることができた。これが大きな自信となり、いまの、そしてこれからの自分を大きく支えてくれる。この経験を活かして将来の夢を叶え、発展途上国のインフラ整備で活躍し、人々の暮らしの向上に貢献したい。



写真4：UWMの卒業式（学位授与式）